

小児の咳嗽診療ガイドライン

Japanese pediatric guideline for the treatment of cough

井上 壽茂

Toshishige Inoue

住友病院小児科診療主任部長

Summary

咳嗽は日常診療で最も頻度の高い症状の1つであり、多くは自然に、あるいは特異的治療により軽快する。しかし、ときには診断・治療に難渋し、遷延したり重症化したりすることでQOLが障害され、生命が脅かされることもある。小児の咳嗽診療の質の向上を目指して、『小児の咳嗽診療ガイドライン』が作成された。的確な診断に基づき病態に即した特異的治療を行うことが基本となるので、多岐にわたる咳嗽の原因を咳嗽の持続期間別に作成されたフローチャートを用いて簡便に診断し各疾患の概念や咳の特徴、治療法が確認できるように工夫されている。エビデンスが乏しく不十分な点もあるが、診療の一助となることを期待したい。

Key words

小児, 咳, ガイドライン, 薬物治療, 診断的治療

はじめに

咳嗽は小児の診療現場で最も遭遇する機会の多い症状の1つである。ウイルス性上気道感染症(いわゆる普通感冒)に伴う症状の1つとしてみられることがほとんどで、短期間のうちに自然軽快するため日常診療で困ることはそれほど多くない。しかし、患者の訴えに応じて鎮咳薬や気管支拡張薬、抗菌薬などによる対症療法を繰り返しても効果が乏しく、長期にわたって咳嗽が反復したり持続したりする場合がある。中には咳嗽のために睡眠や運動などの日常生活が制限されたり、急速に呼吸状態が悪化し生命に関わる事態に陥る小児もまれにみられる。患児や保護者は不安を感じ過剰な薬物使用やドクターショッピングの原因になることが少なくないといわれている。必要に応じて適宜検査や治療を行い、病状や病態についてわかりやすく説明し患者や保護者の理解を促すことが重要である。

I ガイドライン作成の経緯

あまりに一般的でこれまで顧みられることのない咳の診療であるが、患者側の医療への